浄願寺山・稲荷山古墳群
分布調査概報

1973. 3

高松市教育委員会

目　　次

1．調　査　経　過……1

2．古　墳　一　覧　表……4

3．主要古墳の概要……16

第一章　調　査　経　過

1．調査に至るまでの経過

高松市の基礎は，天正16年(1588年)豊臣秀吉の家臣「生駒親正」が讃岐の領主として、当時「篦原荘玉藻の浦」と呼ばれていた地に玉藻城を築城した時にはじまる。

生駒４代54年間の治政後，寛永19年(1642年)松平頼重（徳川家康の孫，水戸光圀の兄）が東讃岐12万石の領主として入国して以来，明治維新までの220年間領内の産業開発に努め，城下町として繁栄の一途をたどってきた。

明治維新を迎え廃藩置県後，香川県庁の所在地となり明治23年市制を施行，順次発展を続けつつあったが，昭和20年７月４日市街地の80％が灰じんに帰す空襲にあった。

戦後の動乱期を経て，積極的な復興が推進され，市街地の整備・拡大が促進されたが，これとともに新しい都市づくりのため順次市域を拡大して，人口28万人を数える四国の中枢管理都市「高松」ができあがった。

市域の拡大と市街地の拡大が順次進行され，市街地南西に近接する石清尾山・紫雲山等の山塊は市街地に浮かぶ孤島となり，山麓にも開発の事業が進行されることとなった。

この山塊は，面積約６㎢、標高約200ｍ，石清尾山を主峰とする紫雲山・浄願寺山からなり，東の屋島（史跡・天然記念物）とともに瀬戸内海に臨む展望台となり，ハイキングコースにも指定されて市民に親しまれ，憩いの場として自然の好条件をそなえたところである。

松の緑につつまれた丘陵には，築成が積石からなるもの，盛土からなるものなど多数の古墳が点在し，弥生時代の遺物が出土することから弥生遺跡としても知られていた。

点在する古墳群は石清尾山古墳と呼ばれ，安山岩を用いた積石墳丘は前方後円・双方中円・円などの形状をもち，盛土墳を含めると古墳は200余基を数え，古墳時代の遺跡として考古学上貴重な存在である。

高松市においては，自然環境に恵まれたこの地域が市街地に至近の位置にあるところから，かねてから市民のレクリェーションの場として開発する構想をもっていたが，開発地区は石清尾山の峰々がのびて環状に連らなる通称摺鉢谷が平坦地に恵まれ，しかも展望地に最適であるため選定され，峰山開発計画が策定された。

開発実施に先だって，開発計画の公共的性格からして峰山地区一帯に点在する大小古墳群のうち開発対象区域内の遺跡の分布状況について調査の申し出があった。（昭和43年12月）　これにより，昭和44年２月12日から同14日まで県・市文化財専門委員による実施踏査を行なった。

その結果，開発計画区域に点在する16基の古墳の所在を確認した。

これにもとづき遺跡保護の国民的課題に対処するため，文化財保護優先の立場に立った開発

計画策定を要望し了解を得るとともに，文化庁に対し石清尾山古墳群史跡指定の資料を提出した。

文化財専門審議会においては，すでに指定している「石船積石塚」に追加して，これらの古墳を「石清尾山古墳群」として指定することが内定した。（昭和45年３月）　指定決定に先だち，指定の範囲ならびに遺跡の現況等の資料作成のため埋蔵文化財緊急発掘調査を実施することとなった。

この調査は，単年度100万円(国50万円，県17万円、市33万円)の予算をもって開始され，第１次(昭和45年度)，第２次(昭和46年度)に分け，市教育委員会が調査主体となり，県教育委員会（松本主事）の指導により，高畑知功氏を中心に，四国学院大学（善通寺市）考古学研究グループの協力のほか，多数関係者の協力援助を得て実施することとなった。

調査場所の峰山地区は，標高150ｍ～200ｍ余，水源に恵まれず，交通不便などのため，調査従事者の往復の悪条件を克服するほか，調査期間の設定にあたっては，従事者の本務にさしつかえない時期を選ぶなどの制約をうけて実施した。

その調査概要は，既報の第１次・第２次調査概報のとおりである。

発掘調査終了に引き続き，峰山開発計画が想定する地域以外に存在する多数の古墳の分布調査をも実施することとなった。

この調査は，峰山開発計画の進行，山麓地帯の都市化現象などに対処する事前調査として実施するものである。

２．調　査　経　過

この調査は，国・県補助事業（予算100万円）として，稲荷山(通称紫雲山)および南側の浄願寺山に点在する古墳群の分布調査を行なうものである。

調査対象区域の山容は比較的急峻であるが，山麓から頂上へかけて緩傾斜するところは果樹園として開墾される部分が多く，近年になって住宅地として開発されるようになりつつある。

山林を形成する部分は，国有林を除くと急傾斜地となっている部分が多いが，生活の合理化・農業の省力化などによって，山林の下草等を堆肥あるいは家庭燃料とする風習が途絶えたため，山林部分はいうにおよばず，山道にも雑草が生い茂り，調査にあたり障害となることが予想された。

これらの自然的条件は，調査にあたり歩行の支障となるほか，遺跡の発見確認のための障害となるため，悪条件の少しでも緩和される落葉の季節を選んで調査するよう期間を設定したのである。

調査団の編成は，市文化財保護委員，その他（詳細別表調査団編成表）で編成し，原則としては調査員の本務外である日曜・休日を調査にあてることとした。

調査期間は，11月開始翌年３月末終了を予定し，自然の中に埋没した奥津城の所在をおって踏査をはじめた。地表面の起伏に注意をはらい草茂る樹間の道なき道を手斧片手にくぐりぬけ，急峻をよじ登り，あるいは岩石累々と山積する奥津城に立って展望を賞で，あるいは樹木にからまれて進路変更のよぎなきに至るなど，自然との戦いの中で変化に富んだ実施踏査であった。

本調査にあたり，京都帝国大学文学部考古学教室の実施した讃岐石清尾山石塚の研究（略称京大報告～昭和８年調査実施）を資料としたことはいうまでもないが，積石塚の場合，岩石のため樹木の生成が妨げられるため積石墳の確認が容易であるが，場所によっては自然に散在する石塊群があり，積石墳の破壊されたものと分別することが困難なものもあるが，盛土墳の場合，樹木の繁茂，下草の茂み，落葉の堆積などにおおわれるものが多く起伏する地表の状況によってわずかに所在を認めるものが多い。墳丘の主体部はほとんどの場合，破壊されて凹んだ状態にあり，石室の露出したものは原形を想定できるが，石塊が散乱して長い年月によってか土石によって埋没するものが多い。

今回の調査は分布調査であるが，遺跡の所在確認とその概要把握を目的としているため，墳丘の計測，石室の計測など現況把握に必要な資料等を得るべく的確な計測を実施することを希望するむきもあったが，調査対象となる遺跡があまりにも多いことと自然的悪条件の環境下にあるため，樹木の伐採，下草の除去など計測調査の前提条件として必要とするため，古墳の所在想定基数・調査業間等を考慮して，所在古墳の確認と平面的な概略計測を行ない，浄願寺山頂に群集する盛土墳の墳丘間距離測定を実施したのである。

しかしながら，100余基にのぼる遺跡の保護と関係遺物の保存については，今後も調査を必要としており，緊急を要する課題となりつつある。

I　稲荷山古墳群

No.	名　称	所在地	所有	地目	立地	墳丘		
						形態	平面計測	高さ
50	稲荷山3号墳	宮脇町稲荷山	国有	山林	尾根鞍部	円墳（積石塚）	直径 9.00 m	1.00 m
51	〃 2号墳	〃	〃	〃	尾根	〃	長径 15.00 短径 11.00	1.50
52	〃 1号墳	室町紫雲山	〃	〃	尾根鞍部	〃	直径 18.00	2.50
53	〃 4号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 8.00	2.00
54	稲荷山姫塚	宮脇町 室町	〃	〃	山頂	前方後円墳（積石塚）	全長 54.00 後円部径 24.00	4.00
55	稲荷山北端古墳	宮脇町稲荷山	〃	〃	尾根突端	円墳（積石塚）	長径 28.00 短径 20.00	2.50

J　野山古墳群

56	野山1号墳	西春日町 野山1063－126	私有	畑	東面した傾斜地の丘陵上	円墳	直径 12.00	3.50
57	〃 2号墳	〃 〃 1063－129	〃	〃	〃	〃	〃 8.00	2.50
58	〃 3号墳	〃 〃 1063	〃	〃	〃	〃	〃 8.00	1.50
59	〃 4号墳	〃 〃	〃	畑 山林	北東に面した尾根上の傾斜地	円墳（積石塚）	長径 7.00 短径 5.00	1.20

K　浄願寺山古墳群

60	浄願寺山1号墳	西春日町日　町 飯田町東山1414	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	直径 16.00 短径 11.00	1.50
61	〃 2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 9.00 短径 6.00	1.50
62	〃 3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 22.00	2.00
63	〃 4号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 10.00	1.50
64	〃 5号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 9.00 短径 6.00	1.50

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm) 全長	玄室	羨道	遺物	現状
不明	不明	不明	不明	不明	土師器	墳兵は撹乱を受けてほとんど失なっている。尾根道にもあたっているため残存部は少ない。
竪穴式石室	〃	〃	〃	〃	不明	尾根道を西半を切られ、中央部には盗掘拡あり。基底部は残存。
不明	〃	〃	〃	〃	〃	尾根道が墳丘中央部を通っているため変形を受けている。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
竪穴式石室	〃	〃	〃	〃	〃	山道が後円部の一部を削る。後円部、前方部に盗掘拡、前方部段築崩壊しかけている。
不明	〃	〃	〃	〃	〃	山道が墳丘を横切り、段築も崩壊しているが、基底部は残存。

横穴式石室（片袖式）	N－16°－E（南）	635 以上	長 310 巾 210 高さ105以上	巾 85 高さ 105以上	不明	畑地化のため墳丘の周囲は削られ石室の奥壁、羨道部先端は破壊。
〃	N－17°－E（南）	440 〃	長 320 巾 160 高さ150以上	巾 100 高さ 100以上	〃	〃
横穴式石室	N－16°－E（南）	500 〃	巾 102 以上	不明	〃	開墾のため盛土は失ない、石室と基底部を残すのみ。
竪穴式石室	不明	不明	不明	〃	土師器片（外表）	荒廃し、中央部に盗掘拡がみられる。

不明	不明	不明	不明	不明	不明	墳丘中央部は深くえぐられ巨石が露出している。畑の境界の壁が墳丘を横断。
横穴式石室（両袖式）	N－42°－W（南東）	560 以上	全長 405 巾 135	巾 75	〃	墳丘中央部は深くえぐられ石室基底部が露出している。
横穴式石室	〃（〃）	推定 800以上	全長 400 巾 228	不明	〃	墳丘中央部は削られ石室基底部が露出、羨道先端は破壊されている。
横穴式石室（両袖式）	N－18°－W（南東）	655 以上	巾 235	巾 140	〃	〃
横穴式石室	N－36°－W（南東）	推定 600以上	巾 150	不明	不明	〃

No.	名　　称	所　在　地	所　有	地　目	立　　地	墳　　丘		
						形　　態	平面計測	高さ
65	浄願寺山6号墳	飯田町東山1414	公　有	山　林	山頂の南面した傾斜地	円　　墳	m 直径　7.00	m 0.50
66	〃　7号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 13.00 短径 10.00	1.50
67	〃　8号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 10.00 〃 8.00	1.00
68	〃　9号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 8.00 〃 7.00	1.20
69	〃　10号墳	〃	〃	〃	〃	円　　墳 （空　掘）	〃 11.00 〃 8.00	2.70
70	〃　11号墳	〃	〃	〃	〃	円　　墳	〃 12.00 〃 8.00	1.50
71	〃　12号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 10.00 〃 8.00	1.50
72	〃　13号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　9.00	1.50
73	〃　14号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径　8.00 短径　7.00	1.50
74	〃　15号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 8.00 〃 6.00	1.00
75	〃　16号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　7.00	0.50
76	〃　17号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　9.00	1.20
77	〃　18号墳	〃	共　有	〃	南面した傾斜地 （山頂部）	〃	〃　7.00	1.50
78	〃　19号墳	飯田町東山	〃	〃	〃	〃	長径 10.00 短径　9.00	1.20
79	〃　20号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 9.00 〃 7.00	2.00
80	〃　21号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 10.00 〃 7.00	1.50
81	〃　22号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 9.00 〃 7.00	1.00
82	〃　23号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径　7.00	1.20

内部構造	石室主軸(開口方向)	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	羨道		
不明	不明	不明	不明	不明	不明	墳丘は削平されている。
横穴式石室	推定 N－12°－W	〃	〃	〃	〃	墳丘は削平され、石室の用材が露出している。最下部は残存しているらしい。
不明	不明	〃	〃	〃	〃	墳丘中央部に大きな盗掘拡あり。
横穴式石室	推定 N－20°－W	〃	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘拡あり。石室の用材が若干露出。
〃	N－16°－W （南）	740 以上	長 355 巾 160 高 160	巾 100 高 110以上	〃	墳丘の周囲は若干削られ羨道の先端部は破壊されているが、本古墳群中保存度は最も高い。
横穴式石室 （片袖式）	推定 N－20°－W	推定 700以上	不明	不明	〃	墳丘中央部に石室の用材が散乱している。
横穴式石室	推定 N－28°－W	推定 600以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘拡あり。
〃	推定 N－20°－W	推定 750以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に石室の用材が露出、基底部は残存。
〃	推定 N－10°－W	推定 600以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘拡あり。
〃	推定 N－22°－W	推定 650以上	〃	〃	〃	墳兵中央部に盗掘拡あり。石室の用材が露出。
不明	不明	不明	〃	〃	〃	わずかな盛りあがりをみせる。
横穴式石室	N－16°－W	推定 700以上	〃	〃	〃	中央部に盗掘拡あり。
〃	N－18°－W （南）	450 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け石室の用材である安山岩の石塊が露出、羨道部先端破壊。
〃	N－14°－W （南）	650 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け、中央部に天井石らしきもの露出。
不明	不明	不明	〃	〃	〃	比較的保存良好。
横穴式石室	（南）	750 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け玄室部の天井石が露出。
〃	推定 N－30°－W	推定 620 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け、中央部に石室の用材が散乱。
横穴式石室	推定 N－16°－W	推定 727 以上	〃	〃	〃	盗掘を受け、中央部の石室の用材が散乱。

No.	名称	所在地	所有	地目	立地	墳丘		
						形態	平面計測	高さ
83	浄願寺山24号墳	飯田町東山	共有	山林	南面した傾斜地（山頂部）	円墳	直径 8.00m	1.20m
84	〃 25号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 9.00 短径 7.00	1.50
85	〃 26号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 12.00 短径 9.00	2.50
86	〃 27号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 8.00	1.00
87	〃 28号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 10.00	1.00
88	〃 29号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 9.00 短径 7.00	1.20
89	〃 30号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 11.00 短径 9.00	2.00
90	〃 31号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 9.00 短径 8.00	1.20
91	〃 32号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 11.00 短径 9.00	2.50
92	〃 33号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 7.00 短径 6.00	1.00
93	〃 34号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 10.00 〃 8.00	2.00
94	〃 35号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 7.00	1.20
95	〃 36号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 10.00 短径 8.00	1.20
96	〃 37号墳	〃	〃	〃	山頂の南東に面する斜面	〃	直径 6.00	1.00
97	〃 38号墳	西春日町南山浦	〃	〃	〃	〃	長径 10.00 短径 8.00	1.50
98	〃 39号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 7.00	1.20
99	〃 40号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 9 00 短径 7.00	1.20
10	〃 41号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 8.00	1.00

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	羨道		
不明	不明	不明	不明	不明	不明	かって畑であったため相当荒廃している。
横穴式石室	N－10°－E	580 以上	〃	〃	〃	墳丘中央部盗掘拡あり、石室の用材散乱。
〃	N－2°－W	810 以上	巾 140	〃	〃	巨大な安山岩の天井石が動かされ石室が露出している。
〃	N－24°－W	推定 560以上	不明	〃	〃	かって畑であったため墳丘は削平され石室基底部が露出。
〃	N－33°－W（南東）	不明	〃	〃	〃	〃
不明	不明	〃	〃	〃	〃	比較的保有度良好。
横穴式石室	N－8°－W	700 以上	巾 155	〃	〃	盗掘を受け石室露出。
〃	N－26°－W	620 以上	推定 310 巾 135	〃	〃	盗掘を受け石室露出。
横穴式石室（両袖式）	N－36°－W	推定 810以上	不明	〃	〃	盗掘を受け石室露出。
横穴式石室	不明	不明	〃	〃	〃	天井石らしきもの露出している。
〃	N－0°（南）	680 以上	巾 133	〃	〃	盗掘を受け石室基底部露出。
〃	N－16°－W	580 以上	不明	〃	〃	盗掘を受け、石室の用材散乱。
〃	N－20°－W	780 以上	巾 155	〃	〃	盗掘を受け石室露出、羨道部破壊。
〃	N－16°－W	550 以上	不明	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
〃	N－0°（南）	750 以上	長 380 巾 150	巾 80	〃	盗掘を受け石室露出、羨道部先端破壊。
〃	N－20°－E	550 以上	不明	不明	不明	盗掘を受け石材散乱。
〃	N－0°（南）	推定 660以上	〃	〃	〃	
〃	推定 N－28°－W	不明	〃	〃	〃	中央部に盗掘拡あり。

No.	名称	所在地	所有	地目	立地	墳丘		
						形態	平面計測	高さ
101	浄願寺山42号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	直径 8.00 m	1.20 m
102	〃 43号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 10.00 短径 8.00	1.20
103	〃 44号墳	〃	〃	〃	〃	〃	直径 7.00	1.20
104	〃 45号墳	飯田町東山	〃	〃	〃	〃	直径 9.00	1.00
105	〃 46号墳	西春日町南山浦	〃	〃	〃	〃	直径 7.00	1.20
106	〃 47号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 9.00 短径 8.00	1.50
107	〃 48号墳	〃	〃	〃	〃	〃	長径 8.00 短径 6.00	1.20
108	〃 49号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 8.00 〃 6.00	1.50
109	〃 50号墳	〃	〃	〃	〃	〃		1.10
110	〃 51号墳	飯田町東山1423	〃	〃	山頂の台地	〃	長径 8.00 短径 6.00	1.00
111	〃 52号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 7.00 〃 5.00	1.00
112	〃 53号墳	〃	〃	〃	南面した傾斜面	〃	〃 10.00 〃 9.00	2.00
113	〃 54号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃 8.50 〃 7.00	1.50
114	〃 55号墳	西春日町南山浦	〃	〃	山頂南東部の突端	〃	〃 8.00 〃 8.00	1.50
115	〃 56号墳	飯田町 西春日町南山浦	〃	〃	尾根上の鞍部	〃	〃 8.00 〃 6.00	1.20
116	浄願寺山57号墳	飯田町	共有	山林	尾根上小台地	円墳	直径 8.00	1.20

L がめ塚古墳群

117	がめ塚	勅使町小山	国有	山林	台地	前方後円墳	全長 25.00 後円部径 15.00	後円部 2.50 前方部 1.00

内部構造	石室主軸（開口方向）	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	羨道		
横穴式石室	推定 N－10°－W	推定 550以上	不明	不明	不明	中央部に盗掘拡あり。
〃	推定 N－12°－W	推定 700以上	〃	〃	〃	中央部に盗掘拡あり、石材散乱。
〃	推定 N－5°－W	不明	〃	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
〃	推定 N－8°－W	〃	〃	〃	〃	盗掘を受け中央部に大きな穴あり。
〃	推定 N－4°－W	〃	〃	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
〃	推定 N－5°－W	〃	〃	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
〃	N－14°－W	推定 500以上	〃	〃	〃	盗掘を受け天井石露出。
〃	N－5°－W	不明	〃	〃	〃	盗掘を受け石材散乱。
不明	不明	〃	〃	〃	〃	石材散乱。
横穴式石室	〃	〃	〃	〃	〃	安山岩の巨石が露出、地山の岩盤を識別が困難。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	中央部に盗掘拡あり、石塊が散乱。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	墳丘は削平され、原形をとどめていない。
不明	〃	〃	〃	〃	〃	墳丘上には石塊が散乱。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	墳丘は大半を失ない、内部構造も失なっている。尾根道が墳丘を縦断。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	中央部に若干のくぼみがあるが、比較的保存度良好。

不明	不明	不明	不明	不明	不明	学校の校地内にある。後円部に給水塔が建ったため後円部は削平され前方部の盛土も削られ基底部を残して破壊。

M　片山池古墳群

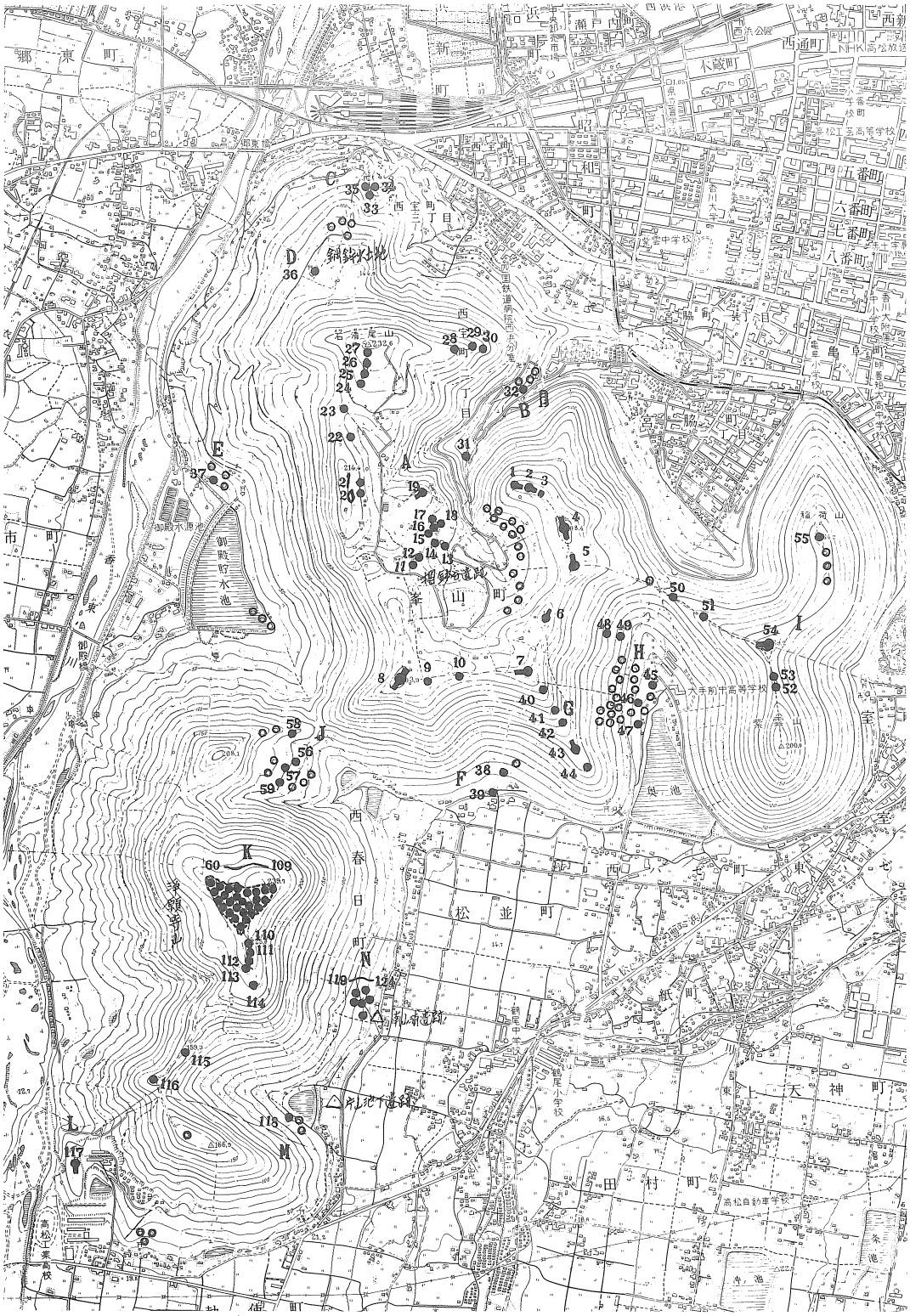
No.	名　　称	所　在　地	所　有	地　目	立　　地	墳丘		
						形　　態	平面計測	高さ
118	片山池1号墳	西春日町南山浦 1626－10	私　有	畑	山麓の北東に面した傾斜地	円　　墳	直径　7.00 m	0.50 m

N　南山浦古墳群

119	南山浦1号墳	西春日町南山浦	県　有	畑	東面する斜面	円　　墳	不　　明	不明
120	〃　2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
121	〃　3号墳	〃	私　有	〃	〃	〃	〃	〃
122	〃　4号墳	〃	県　有	〃	〃	〃	〃	〃
123	〃　5号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
124	〃　6号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

内部構造	石室主軸(開口方向)	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	羨道		
不明	不明	不明	不明	不明	不明	畑地化のため墳丘は削平され石室の用材と思われる巨石が露出している。

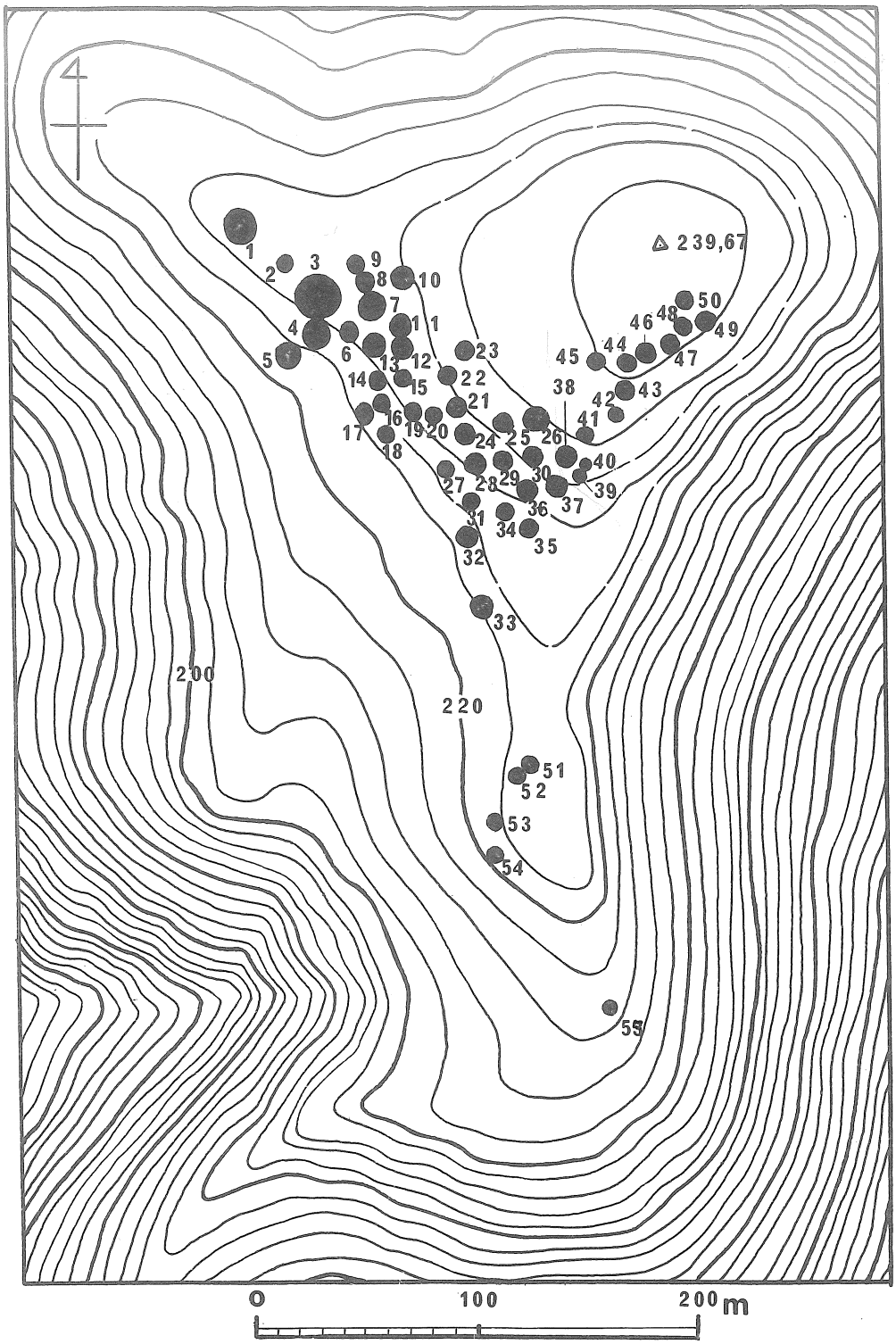
横穴式石室	(南)	860 以上	長 225 巾 180	長 370 巾 140	須恵器、土師器 鉄鏃、鉄釘、 金鑢	県営住宅建設のため、発掘調査を完了し、石室はそのままの状態にしている。
〃	(南)	766 以上	長 416 巾 180	長 350 巾 140	須恵器、鉄鏃 金環、馬具	
〃	(南東)	680 以上	長 460 巾 190	長 220 巾 150	須恵器、土師器、瓦片骨	
〃	(南)	現在長 300	巾 120		須恵器、土師器、鉄鏃	
〃						未調査 羨道部天井石の一部破壊。
〃						未調査 奥壁、側壁のみ残存。



石清尾山塊古墳分布図

●印　現存するもの

○印　京大報告に記載されているが現存しないもの



浄願寺山古墳群分布略図 (約1/3,500)

第三章　各古墳群の素描と主要古墳の概要

稲荷山古墳群（No.50～55）

いわゆる石清尾山の東にある稲荷山の尾根上に存在する積石塚群である。前方後円墳一基を含む。これら個々の古墳の内容は全く判明していないが，おそらく先の摺鉢谷古墳群の(イ)，(ロ)の積石塚群と並ぶ石清尾地域における前期古墳時代の首長集団を構成する一系列と考えられる。

No.50　稲荷山３号墳

立　地　稲荷山と石船塚をつなぐ鞍部中間。現在の栗林トンネルの東側尾根上。海・平野共に眺望は良い。

墳　丘　円墳，積石塚，直径約９ｍ，高さ１ｍ。

内部構造　竪穴式石室

遺　物　かって，土師器が出土したと伝えられた（長町彰1920）京大報告に図が載っている。それによれば，壺・高杯等が存在した。しかし，実見できないので詳細は不明。

現　状　採石されたとのことで，今はその跡を留めるにすぎない。

問題点　積石塚の形態を取る小円墳のうち，その出土土器から年代の推定できる貴重な古墳である。この土器の時期は，猫塚出土の土師器よりは後出するものと思われる。

No.51　稲荷山１号墳

立　地　稲荷山姫塚から標高200ｍの紫雲山に至るほぼ中間地点に位置する。屋根の鞍部に存在し，海に対する眺望はよくない。

墳　丘　円墳，積石塚，直径18ｍ，高さ２.５ｍ。石塊・移動が著しく，原形を留めていないので，墳形は確定できないが，今は円墳としておきたい。京大報告では前方後円墳としているが，「前方部」は現状では地山の露頭としか理解できない。現段階では前方後円とすることは困難である。今後の発掘調査によって確定すべきである。

内部構造　不　明

遺　物　不　明

現　状　尾根道が墳丘を横断しており，また盗掘を受けたらしく，石塊の移動が激しい。

問題点　本墳が前方後円墳か円墳か本古墳群の理解の仕方が相違してくる。そうした意味では，今後十分な検討を要する。

No.54　稲荷山姫塚

立　地　栗林公園の借景紫雲山のほぼ中間地点，いわゆる稲荷山と室山の境界上に位置す

る。それは同時に栗林トンネル上部の鞍部より東に登った最高位であり，いわば3方向の分岐点にある。

墳　　丘　前方後円墳，積石塚，全長約58m，後円部約27m，高さ約4m，前方部長約31m，幅約18m，高さ約3.5mである。地形に制約されているためか現在みるかぎりでは，後円部は完全な正円ではなく，北東方向に歪んだ形状を示す。また，地盤が西方，すなわち前方部に向かって傾斜しているため，後円部からみれば前方部は低く狭長である。また，墳形維持のため非常な努力を傾むけている。特に前方部先端は後円部が2段，前方部の途中までは2段策成であるのに比べて，少なくとも6段階状に積みあげられている。こうした構築方法は，姫塚と類似する。

なお，外表部特に南側のくびれ部付近に土師器片が散在していたことが京大報告に記されている。

内部構造　後円部に竪穴式石室の痕跡らしきものが見られるが，詳細は不明。なお前方部にもかって主軸と平行して小竪穴式石室が存在していたと言われているが（笠井新也1933）確認できていない。

遺　　物　不　　明

現　　状　尾根道が後円部の一部を横切っているため墳丘が削られている。また前方部付近の段築が崩壊しかかっている。

問 題 点　本墳は，このグループ内においては現在判明する限りでは最も古いと思われる。しかも，前方後円墳という墳形を有しており，先の猫塚等と共に石清尾における首長集団を構成する。有力な集団の中核として存在している。また前方部先端の段築は今もその面影を留めており，今後とも絶対に保存されなければならない。

No.55　稲荷山北端古墳

立　　地　稲荷山の最北端の尾根上に位置し，かっての海に面している。

墳　　丘　円墳，積石塚，長径約28m，短径20m，高さ2.5m。墳形は石塊の移動が激しいため明らかでないが，現状は円形というより多角形的形状を示している。これは円墳の両側に小さな造り出しが付いたため，このような形態になったとも考えられるが決め手がない。こうした墳形が地形の制約によるものか，あるいは意識的に定められたものかについては今後の課題である。埴輪・外表の土器等については不明。

内部構造　不　　明

遺　　物　不　　明

現　　状　尾根道が墳丘を横切っている。また盗掘拡も存在し，段築も崩壊している。

問 題 点　この石清尾地域内にある円墳としては，最大規模を有している。その墳形とともに注目すべきものである。

なお，この古墳と稲荷山姫塚の間にも２，３の積石塚が存在したらしい。現状では確認できなかった。さらに栗林トンネル鞍部のNo.32古墳から西へ100ｍ程の尾根上に土師器片の集中的に分布する個所があり，かっては，ここにも積石塚が存在したらしい。

野山古墳群（No.56～59）　　（No.56～

本古墳群は，積石塚群と横穴式石室墳群とに大別できる。本来ならば，当然別個の古墳群と把握すべきであるが，記述の便宜上一括した。積石塚は，猫塚から西に急斜面を下った尾根鞍部西側に存在する。かっては，３基存在したが残存するもの１基のみである。内容の判明しているものは小円墳であって，内部主体は竪穴式石室である。遺物が判明していないので時期は明らかでないが，摺鉢谷古墳群の(ハ)，(ニ)等に類似するものと考えられる。

横穴式石室墳群は，この積石塚の南の小台地に存在する。かっては８基ほど存在していたらしいが，残存するものは３基である。石室の形態は，石清尾における一般的なものである。この古墳群も，内容的には，これまで紹介してきた石清尾における後期群集墳と同様なものとすることができる。

No.56　野山１号墳

立　　地　東面した傾斜地の小丘陵上。

墳　　丘　円墳，径約12ｍ，高さ約3.5ｍ，盛土は地山の土と同じ。外表施設は不明。

内部構造　横穴式石室，石室全長635cm以上，玄室長310cm，巾210cm，高さ200cm以上，羨道長325cm以上，羨道巾85cm，高さ105cm以上の片袖式（右袖－玄室から羨道部に向かって）石室である。奥壁は，一枚石が使用されているが，大きさが不足しているため両側に安山岩割り石をつめこんでいる。側壁は，横長の安山岩を基底部に据え，ほとんど持ち送りをせずに５段程積みあげている。玄室天井石は２枚，羨道部は残存天井石３枚を使用，石室は南に開口し，主軸（Ｎ－16°－Ｅ）は等高線・方向と一致する。

遺　　物　不　　明

現　　状　果樹園の中にあり，そのため墳丘は削平され，羨道部先端・奥壁付近が破壊されている。

問 題 点　遺物が判明していないので時期比定は困難であるが，石室形態から言って，石清尾における一般的な姿として捉えられる。

No.58　野山４号墳

立　　地　石清尾山（御殿山）から浄願寺山に至る鞍部切り通しの西側尾根の傾斜地。

墳　　丘　円墳，積石塚，長径７ｍ，短径５ｍ，高さ約1.2ｍである。

内部構造　竪穴式石室

遺　　物　墳丘外表に土器片が散在。厚さ１cm～0.6cmあり，外面はへら磨き，内面はへら削り～指整形が施され，赤褐色を呈する。焼成胎土ともに良好。大形の壺の一部であろうか。

現　　状　畑地化によって若干積石が削られている。また，中央部に大きな盗掘拡が存在する。

問 題 点　主要な前方後円墳。双方中円墳に続く時期の所産と思われる。なお，本墳から尾根東に30ｍ程下た所に積石塚の痕跡らしきものがある。これがどうやら，京大報告で竪穴式石室が図示されている古墳に当たるらしい。

浄願寺山古墳群（No.60～No.116）

主要な積石塚が分布する摺鉢谷をめぐる山塊の南に，標高239.67ｍの源願寺山が存在する。浄願寺山は，北より標高208.1ｍの野山，標高239.67ｍの浄願寺山，標高169ｍの小山の三つの山塊よりなっている。このうち，古墳は主として中央部の標高239.67ｍの浄願寺山の山頂部の斜面一帯に分布するが，浄願寺山と小山とを結ぶ標高150ｍ～160ｍ程の尾根鞍部にも若干存在する。外表からの表面観察によれば，これらの古墳のほとんどは，径10ｍ前後の小円墳であり，内部主体は横穴式石室である。特に浄願寺山山頂部付近に群集する古墳（No.61～No.110）は，判明する限りでは，すべて円墳であり横穴式石室を持っている。墳丘・石室・規模等には，若干の格差が認められるが，墳形上の差異は存在しない。遺物が全く判明していない現在，これら古墳相互間の質的差異を明らかにすることはできず，築造時期・追葬期間を限定することも極めて困難である。わずかに露出する横穴式石室の形態から，六世紀後半～七世紀前半にかけて，この山頂部に古墳としての機能を果たしていたと，漠然と推定する以外にない。この239.67ｍ付近に存在する古墳は，およその数50基，それらは極めて近接して造られており，墳丘が累々と横たわっている。これらの古墳は群として一括して把握できるが，そのうちでも若干のグルーピングが可能である。しかし，現段階では，何も言えない。古墳の分布にも，何らかの規制がなされているかの如く馬蹄形にめぐり，中央に空地を残す。ともかくも，本古墳群は，平野部からの比高200ｍ余の所に立地し，後期の群集墳の一般的在り方と傾向を異にする。石清尾山古墳群中でも，山麓の後期群集墳とは立地において際立った対照を見せている。しかし，その他の内容になれば，ほとんど同じである。このような高地に築かれた理由は，今後の究明課題である。

浄願寺山古墳群には，先に若干述べたように中央部山麓の山頂付近に分布する50基程の群集

墳のほかに，これら古墳群の南部に若干の古墳が存在するが，その内容は明らかでない。

浄願寺山古墳群の特徴の一つに，そのまとまりの良さがあげられる。特に50数基の殆んどが盗掘を受けているとはいえ，かたまって墳丘まで残存する古墳群は，香川県ではほとんど存在しない。こうした意味でも，貴重な存在と言わなければならない。

No.70　浄願寺山10号墳

立　地　山頂平坦部の南面する緩やかな斜面。

墳　丘　円墳，長径11m，短径８m，高さ２.７m。なお墳丘の周囲に空掘らしきものが見受けられる。

内部構造　横穴式石室，石室全長740cm以上，玄室長355cm，幅160cm，高さ160cm，羨道部巾100cm，高さ110cm以上の片袖式石室である。石室は，南方向（石室主軸N－16°－W）に開口している。奥壁は，１枚石を使用し，側壁には横長の安山岩を基底部に据え，その上段は，小形の割石をほとんど持ち造りせずに積みあげている。床面には，安山岩割石が敷かれている。

遺　物　不　明

現　状　羨道部先端部が破壊され，石室内に土砂が若干入り込んでいるが，その他は保存が良い。

問題点　50基程の群集墳中の１基である。本墳は，保存度の最も良い古墳の一つである。石室形態からは，群集墳の盛行な時期の所産としか言えない。他の古墳も多少の差異は存在しようが，本墳と類似するものと推定される。

L　がめ塚古墳郡（No.117）

浄願寺山山塊の最南端部に位置する。現在は，そのほとんどが国立学校の校地内にあり，消滅して確認できないが，小形の前方後円墳１基を含む数基の古墳が存在したらしい。前方後円墳以外の古墳は円墳であって，立地から考えれば，後期の横穴式石室墳であった可能性が強い。したがって，この時期にまでは下るとは考えられない前方後円墳との間には，大きな空白期が存在するわけである。この古墳群の内容については，明らかにしえない。

No.117　が め 塚

立　地　浄願寺山山塊の最南端よりやや西。現在の香東川に面して標高52mの小丘陵がある。本墳は，かってこの地に存在した。

墳　丘　前方後円墳，全長約25m，後円部径約15m，高さ２.５m，前方部の巾約９m，高さ１mの前方部のあまり発達しない前方後円墳であったらしい。外表の施設は不明であるが，葺石は存在しなかったらしい。前方部を南に向けている。

内部構造　不明。破壊された時石が全然見あたらなかったと伝えられており，あるいは粘土

榔のようなものであったかもしれない。

遺　物　不　明

現　状　かっては原形を留めて存在していたが，学校の給水塔建設用地となり，墳丘が削平されてしまった。現在，墳丘の基底部がわずかに残存している程度で，内容が把握されないまま破壊された。

問　題　石清尾古墳群中，最南端最下位の前方後円墳であり，唯一の盛土前方後円墳である。内容が判明していない現在，時期比定は困難である。

M　片山池古墳群（No.119）

浄願寺山の山頂部と標高169ｍの小山との形成する小さな谷間が山狭東側に存在する。その小谷間の北東に面した傾斜面に，かつて３～４基の古墳が存在したらしい。現在，かろうじて確認できる古墳は，１基にすぎない。この古墳も破壊の度合が著しいが，横穴式石室墳と推定される。他の古墳もおそらく同様な内容を持っていたと予想され，全体としては，この石清尾山塊の山麓に分布する後期の群集墳と変わりないと推定される。他の古墳もおそらく同様な内容を持っていたと予想され，全体としては，この石清尾山塊の山麓に分布する後期の群集墳と変わりないと推定される。なお，この古墳群のすぐ東には坂田廃寺がかって存在した。